

# モンゴル・カザフスタン騎馬遠征偵察

ジュチ・プロジェクト

40代OB 桜井真也

隊員構成： 野本和欣（隊長、渉外）、桜井真也（副隊長、装備）  
里見研（撮影）、塩貝誠（食糧、ビデオ撮影）  
森貴徳（医療）、村上雄介（医療）

遠征地：モンゴル国東部

期間：1997年8月6日～9月17日

目的：（本遠征）モンゴルからカザフスタンを人間と馬で踏破する  
（モンゴル帝国を築いたチンギス・ハーンの長子、  
ジョチの遠征ルートを進る）  
（偵察隊）本遠征の縮小版をモンゴル国内で行い本遠征に向  
けての練習、問題点のあぶり出しを行う



## モンゴルへの漠然とした憧れ

隊員6人の遠征参加への動機は様々であったが、モンゴルの大草原という漠然としたイメージへの憧れがあった。例えば遠征立ち上げのメンバー野本、桜井の場合は1992年にNHKでシリーズ放送された「大モンゴル」の映像だった。日本では見ることが出来ない果てしない大草原。その上を走る馬群の勇壮な姿。実際に行ってみようと思った。

「モンゴルの果てしない大草原で馬を走らせたい」その思いだけを共通項に、96年末、野本、桜井、里見、塩貝、森の5人が集まる。

その後、手段のために目的を見つけるような作業に入るようになった。「モンゴルで馬に乗る」、それだけなら当時でも旅行者の乗馬ツアーに参加すれば可能なことだった。もっとスケールの大きい、自分達で道をつける形にしたい。意見を出し合った結果、チングス・ハーンの子で中央アジアに勢力を誇った「ジュチ」の遠征路を馬と人間だけで辿るという形になった。現在でいうと、モンゴルの首都ウランバートル付近から、カザフスタンのアルマトイ付近までのおよそ4000kmの道程ということになる。

## 計画実現に向けて

97年2月から3月にかけて、モンゴル国の偵察合宿を行った。目的はモンゴルの遊牧文化に慣れること、乗馬の練習、長期の遠征に向けて食料調達の方法を探ることである。

乗馬の練習については今回ビザの手配もお願いした「しゃがあ」に協力を依頼し、

遊牧民のゲル（モンゴル遊牧民の住居）にホームステイしながら行うことができた。場所はウランバートルからおよそ100km離れたところにある2軒のゲル。隊員は2手に分かれて遊牧民家族にお世話になった。

日本の乗馬センターで乗馬の練習をしていたが、蒙古馬に乗るのは初めて。アラブ種などの背の高い馬と比べて、ずっと乗りやすかった。乗馬の練習といってもそのための時間があるわけではない。家族の子供やおじいさんと水汲みや何キロも離れた町に買出しに行きながら馬に慣れていった。隊員全員1日か2日でそれなりに乗れるようになったが、現地の子供のようにあぶみの上に立った状態で馬を走らせたり、鞍とあぶみの裸馬を乗りこなすようなことはまだ出来なかった。しかし、周りは冬のため緑の草原ではないが、夢にまでみた大草原で現地の生活に馴染み、馬の背に揺られながら幸せな時間を過ごすことが出来た。

またこの合宿でモンゴルの文部省の下部組織「モンゴル文化基金」の協力を得ることが出来るようになった。この後に入国する時に受け入れ機関になってもらうことと、インビテーションを発行してもらうことになる。今回入国する前に日本の国立民俗学博物館に研究員として訪れていた文化人類学者ルハグバ・スレーン氏が我々の世話をしてくれることになり、食料調達の方法やジュチの辿ったルートなどについて相談に乗ってもらった。

また、本番を想定したプレ遠征（偵察行）を行う必要を考えていた我々に馬のガイド、シャラブ・ドルジ氏を紹介してくれた。

## プレ遠征に向けての準備

その後、97年4月に村上が入隊。6人でメンバーを固定した。そして6月に桜井が単独でプレ遠征の準備のためモンゴルに渡る。偵察合宿の時スレーン氏から紹介されたドルジ氏と共に準備を行う。ドルジ氏は遊牧民出身で、当時はウランバートルに住みながら

乗馬ツアーのガイドなどをしながら生計をたてていた。かつては馬術学校で講師をしていたという。彼の奥さんは日本に住んだこともある親日家で、片言の日本語を話すことが出来、通訳してもらえた。ドルジ氏自身は片言にもならない英語を話していたが、その内に、桜井の片言モンゴル語と奥さんの片言日本語、そして辞書を介してコミュニケーションをとるようになった。

ドルジ氏と共に彼の実家や他のゲルをまわり、馬と馬車、馬の世話をするガイドを探した。馬は借りるのではなく、我々が買い取り、遠征までは現地の遊牧民に世話をしてもらおう形になったが、後で考えるとこれは失敗だった、世話代と称して結構なお



大草原の中のゲル

金を催促されたからだ。ドルジ氏の知り合いの遊牧民を訪ねてまわり、馬を見ていく。といっても、桜井は馬の良し悪しはわからないので、ドルジ氏任せになる。たくさんの馬を見たが、数百種類の色があり、それぞれ色の名前があるという。

モンゴル人と馬との深い関わりの一端を見たような気がした。モンゴルの遊牧民と話していると馬を本当に愛していることがわかった。遊牧民はその土地にもよるが、馬、羊、やぎ、牛、らくだを放牧している。馬以外の家畜は大事だが、あくまでも生きていくための家畜で、馬は別格、我々のパートナーだと多くの遊牧民が語ってくれた。おおよその馬の手配を済ませ、その他馬車、鞍、あぶみなどをプレ遠征までに製作しておいてもらう約束をし、桜井は帰国。

## 本遠征に向けた偵察隊

期間：1997年8月11日～29日

場所：ウランバートル近郊のゲル

～ハラホリン間往復およそ500km

8月6日モンゴル入りした我々はウランバートルで食料の調達など準備を済ませ、8日、スタート地点となるドルジ氏の妻スレーンさんの実家に車で向かう。ウランバートルからおおよそ50kmの地点。

乗馬の練習、馬車の引き取りなど準備を済ませ、11日に行程開始。荷物を馬車に積み込んでから、我々はそれぞれ勝手に名前をつけた馬にまたがってかつてのモンゴル帝国の都（カラコルム）があったハラホリンを目指した。

## 旅の一日

朝はだいたい6時頃起床、朝食を済ませ、馬車に荷物を積み込んで出発する。馬車には我々の生活用品、テント、食料、太陽電池パネルなど、あわせて200kgを超える荷物を載せることになった。バランスをよくしないと、そのまま馬車馬の負担になるため荷物の積み込み作業には時間をかけた。だいたい一日に20kmから30kmの距離を移動した。モンゴルの8月は湿気はないが、日差しが強いため馬の疲労具合を見て夜に行動することが何回かあった。月明かりが十分にある時に限られるが、馬も涼しい時に走る方が疲れないよう距離を稼ぐことができた。月明かりに照らされた深い緑色の草原と、湿地帯の水溜りが作り出す幽玄な景色の中、馬を疾駆させた思い出はいまだに忘れることができない。

通常夜にキャンプを張る時は、夕食をとったあと交代で馬の見張りにつく。馬は夜の間、2頭の足を片方ずつ縛るなどして移動しにくくして草原に放つ。一所に縛っておくと草を十分に食むことができないからだ。

## 隊長野本の離脱

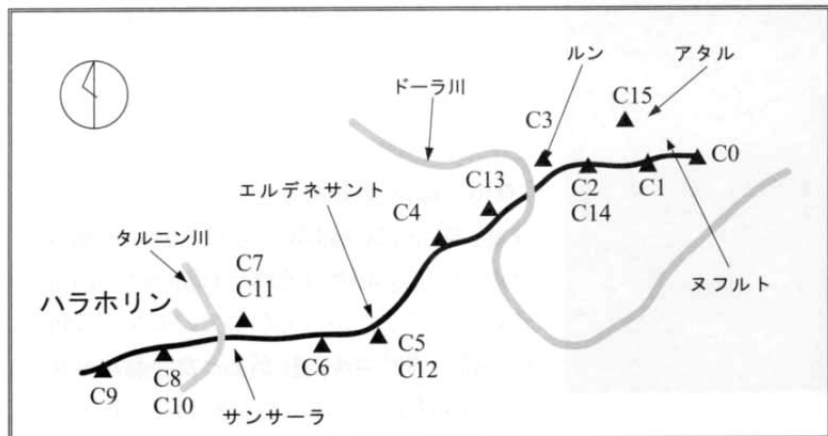
行程開始からわずか3日目の13日、事故が起きた。隊長の野本が落馬し鎖骨を折ってしまった。

モンゴルの草原にはわかりにくい小さな穴がよく見られる。小動物の巣や、乾燥のため、地面の下層に空洞が出来たもので、それを踏み込むと馬はバランスを崩したりこけてしまったりする。モンゴルで落馬する原因はかなりの確立でこれだ。他の隊員も幸い怪我はなかったが一日一回は落馬していた。その時、野本は馬を走らせていたが落ち方が悪かった。近くの町の診療所まで搬送されるが、医療技術に疑問があったため帰国して治療を受けることになった。その後は桜井が隊長になり、計画は予定通り進めることになった。

## 恐怖のアイラグ

アイラグとは馬乳酒のこと。馬の乳を発酵させて作るもので、非常に栄養分が高く、これだけで食事がわりにする遊牧民もいるという。旅の途中、遊牧民のゲルにお邪魔することが何回かあったが、アイラグを勧められる。そしてアイラグを飲んだ後に馬

に揺られると腹がパンパンに張ってきて、すぐに下痢になる。水や少々不衛生な食事が原因の一つでもあるが、隊員はこれによくお腹をやられた。無言で隊列を離れ、大草原にポツンとしゃがむ隊員の姿



がよく見られた。

## 馬の治療

特に馬車馬が背中を怪我することが多かった。鞍と背中が擦れて皮が剥けてしまい、ひどい擦り傷の状態になる。オキシドールをかけて治療するが、なかなか治らない。我々の遠征は馬と人だけで行きたいという思いがあったが、背中に酷い傷を負いながら重い馬車を懸命に引っ張る馬の姿を見ると申し訳ない気持ちになった。無邪気に自分達のやりたいことをやるだけでいいのかと自問自答した。



馬に曳かせる荷車

## 旅の折り返し地点ハラホリン

ハラホリンはかつて第2代ハーンのおゴデイが都に定めた場所である。9日間の行程を経て、我々はハラホリンに着いた。近隣では比較的大きな町で、チベット仏教の寺院エルデニ・ズーがあるため国内外からの観光客も多い。町の周りには樹木も多く、畑も広がっていた。あてどなく見える大草原を越えてきた我々には久々に人の気配を感じる風景だった。

町の郊外にキャンプを張り、3日間滞在した。到着した翌日には町の中に入り、エル

デニ・ズーを見学した。その後往路より短い7日間でスタート地点に戻ってきた。

このプレ遠征により、馬と馬車と人間で長期間旅をする実感を得ることが出来たが、それ以外の問題も多く残っていた。

偵察後、桜井が国境越え関係の渉外のためモンゴルに、野本、里見がカザフスタンの現地偵察に行った。国境越えの問題についてはあまり成果を得られず、カザフスタンの偵察行では2人がマフィアなど危険な状況に遭遇し、本遠征のルートから外すことも考えるようになった。

計画は思うように進まず、遠征費用、国境越え、卒業を控えた隊員が遠征計画から外れるなど多くの問題を抱え、本遠征を行うことなく98年騎馬遠征隊を解散した。熱意が足りなかったといわれればそうかもしれない、大草原を馬で旅して満足してしまったのではないかと、といわれればそうかもしれない。大風呂敷を広げすぎてしまった結果なのか。元隊員で集まって酒を飲む時、それぞれあまり表に出すことはないが、10年前に残してきた何かくすぶったような思いを感じる時がある。

最後になりましたがこの遠征隊に協力してくださった各関係機関の皆様へ感謝します。また、未完に終わったこの遠征計画をもう一度振り返る機会を与えて下さった田口さんに感謝します。

(40代OB)